

学位論文要旨

韓国人日本語学習者における  
日本語漢字単語の処理過程

—漢字と語彙の習熟度，学習環境の違いに着目して—

広島大学大学院 教育学研究科  
文化教育開発専攻（日本語教育学分野）

松島 弘枝

# I 論文題目

韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程  
—漢字と語彙の習熟度，学習環境の違いに着目して—

# II 論文構成（目次）

## 第1章 問題と目的

第1節 はじめに

第2節 先行研究の概観

第3節 本研究の目的

## 第2章 韓日の漢字の形態・音韻類似性調査

第1節 1字漢字の調査

第2節 2字漢字単語の調査

## 第3章 日本語1字漢字の視覚的認知における韓国語と日本語の形態・音韻類似性の効果

第1節 実験1, 2の概観

第2節 韓国在住の学習者を対象とした読み上げ課題による検討（実験1）

第3節 日本在住の学習者を対象とした読み上げ課題による検討（実験2）

第4節 実験1, 2の総合考察

## 第4章 日本語2字漢字単語の視覚的認知における韓国語と日本語の形態・音韻類似性の効果

第1節 読み上げ課題による検討（実験3, 4）

第2節 語彙判断課題による検討（実験5, 6）

第3節 実験3～6の総合考察

## 第5章 日本語2字漢字単語の視覚的認知における単語タイプ（同根語と非同根語）の効果

第1節 実験7～10の概観

第2節 韓国在住の学習者を対象とした読み上げ課題による検討（実験7）

第3節 日本在住の学習者を対象とした読み上げ課題による検討（実験8）

第4節 韓国在住の学習者を対象とした語彙判断課題による検討（実験9）

第5節 日本在住の学習者を対象とした語彙判断課題による検討（実験10）

第6節 実験7～10の総合考察

## 第6章 総合考察

第1節 実験結果のまとめ

第2節 本研究の意義と発展課題

## 引用文献

資料

謝辞

### Ⅲ 論文要旨

#### 第1章 問題と目的

##### 第1節 はじめに

韓国語を母語 (native language: 以下, L1) とする日本語学習者 (以下, 韓国人学習者) が日本語漢字を視覚的に捉え, その形態・音韻・意味を処理する際, L1 の漢字知識はどのように影響するのであろうか。海保 (2002) は, 中国語を L1 とする中国・台湾・香港の日本語学習者 (以下, 中国語系学習者) と共に韓国人学習者を漢字圏学習者と位置付けている。しかし, 現在の韓国では日常生活において漢字はほとんど使用されていない (李, 2005; 宋, 2004; 曹, 1994)。そのため, 日本語漢字の処理において, 中国語系学習者とは異なる部分があると推測される。しかし, オンライン法 (on-line method) を用いて日本語漢字の処理に及ぼす L1 の漢字知識の影響を検討した研究の多くは, 中国語系学習者を対象としたものであり, 韓国人学習者を対象とした日本語漢字の処理については明らかにされていない点が多い。本研究では, 中国語系学習者を対象に行われた先行研究に倣ってオンライン法を用いた実験を行い, 韓国人学習者の日本語漢字単語の処理過程を検討する。

##### 第2節 先行研究の概観

単語認知 (word recognition) 研究とは, 呈示された視覚パターンあるいは聴覚パターンを手がかりとして, 心内辞書 (mental lexicon) に蓄積されている語彙情報 (形態, 音韻, 意味などの情報) がどのように検索され, 作動記憶 (working memory) に呼び出されて利用されるかを解明しようとする研究分野である (池村, 2003)。語彙情報のうち, 形態と音韻に関する情報は語彙表象 (lexical representation) として心内辞書に内在 (表象化) しており, 意味に関する情報は概念表象 (conceptual representation) として心内辞書に内在 (表象化) している。これらは相互につながっており, ネットワーク構造になっていると仮定されている。そして, 呈示された単語が活性化すると, それがネットワークを通して他の単語にも伝わるという活性伝播 (spreading activation) と呼ばれる現象が生じ, 単語の処理過程において干渉効果や促進効果をもたらすとされている (松見・邱・桑原, 2006)。そのため, 単語の処理における抑制や促進の効果は, ネットワーク内の単語間関係 (形態・音韻・意味などの類似性) の強弱によって説明できる。

単語認知に関する実験の方法は大きく分けてオンライン法とオフライン法 (off-line method) の2種類がある。オンライン法とは, 実験参加者の心内で進行中の処理状況を直接的に反映する (と考えられる) 反応測度 (response measure) を持つ実験手法である。その反応測度は, 主として読み上げ課題 (naming task), 語彙判断課題 (lexical decision task) などでの反応時間 (reaction time) である (阿部・桃内・金子・李, 1994)。

バイリンガルの認知研究は, 1950年代以降に始まり, 1980年代に入ってから, オンライン法を用いた実験によってバイリンガルの単語処理過程が検討されるようになった (石王, 1999)。近年では, Kroll & Stewart (1994) が提唱した改訂階層モデル (revised hierarchical model) を枠組みとして, 中国語系学習者を対象に日本語漢字単語における心内辞書の解明が試みられている

(e.g., 蔡・費・松見, 2011; 松見・費・蔡, 2012; 長野・松見, 2013)。しかし、この研究成果をそのまま韓国人学習者に当てはめることはできない。中国語系学習者は日本語を学習する前から L1 としての漢字知識を豊富に持っているが、韓国人学習者は日本語学習初期の段階では L1 の漢字知識は豊富ではない。ただし、日本語の習熟度が上がると漢字知識が多くなり、L1 の漢字知識も増える可能性がある。

鄭 (2010) は、韓国語と日本語 (以下、韓日) で同形になる 2 字漢字単語の韓国語読みのテストを行い、日本語の学習が進み習熟度が上がると、韓国語の漢字知識が増えることを明らかにしている。これは、日本語の学習を通して、韓日で共通する漢字語彙から韓日の漢字の対応に気づくようになるため、日本語の習熟度がある程度高くなると、日本語の漢字と語彙の知識だけでなく、L1 である韓国語の漢字知識も豊富になることを示唆している。また、邱 (2002) は、習熟度が高い日本語学習者を対象にして、日本語漢字単語の処理経路を検討し、韓国人学習者は、日本語の音韻を媒介して意味アクセスする可能性が低く、形態情報に依存して意味アクセスする台湾人日本語学習者の処理経路と類似していることを指摘している。このことから、韓国人学習者の日本語漢字の処理過程は、韓日の形態・音韻の類似性だけでなく、日本語の漢字と語彙の知識によって大きく変わると考えられる。

### 第 3 節 本研究の目的

中国語系学習者の心内辞書の表象関係は明らかにされつつある。しかし、韓国人学習者については心内辞書の基本的な表象関係は明らかにされていない。本研究では、その表象関係を解明することを目的に、日本語の 1 字漢字および 2 字漢字単語を材料にオンライン法を用いた実験を行う。具体的には、中国語系学習者の処理過程を扱った先行研究をふまえ、日本語の習熟度や学習環境の違う韓国人学習者を対象に、韓日の形態 (字体)・音韻類似性および単語タイプ (同根語・非同根語) を操作し、読み上げ課題と語彙判断課題を用いる。

## 第 2 章 韓日の漢字の形態・音韻類似性調査

### 第 1 節 1 字漢字の調査

実験に使用する材料選定のために、韓国語を L1 とする日本語の未習者と既習者を対象に、1 字漢字の韓日形態・音韻類似性を調査した (形態類似性調査では未習者 23 名、既習者 20 名、音韻類似性調査では未習者、未習者ともに 20 名)。437 字の 1 字漢字を 7 段階尺度評定によって測定し、それを数値化した。

### 第 2 節 2 字漢字単語の調査

実験に使用する材料選定のために、韓国語を L1 とする日本語の未習者と既習者を対象に、2 字漢字単語の韓日形態・音韻類似性を調査した (形態類似性調査では未習者、未習者ともに 20 名、音韻類似性調査では未習者 23 名、未習者 20 名)。形態類似性調査は 654 個、音韻類似性調査はその中の 435 個の 2 字漢字単語を 7 段階尺度評定によって測定し、それを数値化した。

### 第3章 日本語1字漢字の視覚的認知における 韓国語と日本語の形態・音韻類似性の効果

#### 第1節 実験1, 2の概観

第3章では、読み上げ課題を用いた実験を行い、視覚呈示された1字漢字の処理における韓日の形態・音韻類似性の影響を検討した。実験1では、日本語の漢字と語彙の習熟度が異なる韓国在住の学習者を対象とし、実験2では日本在住の学習者を対象とした。実験1a, 2aでは形態類似性を、実験1b, 2bでは音韻類似性を操作して実験を行った。

#### 第2節 韓国在住の学習者を対象とした読み上げ課題による検討(実験1)

実験1aでは39名を、実験1bでは44名を対象に漢字テストと語彙テストを実施し、その成績上位15名を上位群、下位15名(実験1bは18名)を下位群として分析の対象とした。実験1aでは形態類似性の主効果は有意ではなかったが、試みに上位群のみで分析したところ、形態類似性の抑制効果がみられた。実験1bでは上位群、下位群にかかわらず音韻類似性の促進傾向がみられた。

#### 第3節 日本在住の学習者を対象とした読み上げ課題による検討(実験2)

実験2a, 2bともに15名を対象に実験を行った。実験2aでは形態類似性の抑制効果がみられ、実験2bでは、促進または抑制の効果はみられなかった。

#### 第4節 実験1, 2の総合考察

形態類似性を操作した実験については、日本語の漢字と語彙の習熟度が上がり、L1である韓国語の漢字知識が豊富になれば、形態類似性の抑制効果がみられることが示された。これは、形態類似性高の漢字では、韓国語の形態表象と音韻表象の連結が強くなるが、すべてが音韻類似性低の漢字であるがゆえに、韓国語と日本語の音韻表象どうしの連結は弱いままとなり、韓国語の音韻表象の活性化のみに基づく韓国語音による同時的な干渉が生じたためであると考えられる。

音韻類似性を操作した実験については、実験1bでは、有意傾向がみられ、韓日の音韻表象どうしの連結は、日本語学習の早い段階から形成されることが分かった。しかし、実験2bでは音韻類似性の主効果は有意ではなかった。実験1bとの比較から、日本在住の学習者は、韓日の音韻類似性高の漢字だけでなく音韻類似性低の漢字についても、日本語の音韻表象の形成度が高く、L1とL2の音韻表象どうしの連結の強弱による影響をあまり受けずに、日本語の音声出力がなされたと推測される。

### 第4章 日本語2字漢字単語の視覚的認知における 韓国語と日本語の形態・音韻類似性の効果

#### 第1節 読み上げ課題による検討(実験3, 4)

第1節では、日本語の2字漢字単語について、韓日の形態・音韻類似性を操作し、読み上げ課題を用いた実験を行った。実験3a, 3b(韓国在住の学習者対象)では、52名に漢字テストと語彙テストを実施し、その成績上位15名を上位群、下位15名を下位群として分析の対象とした。実験4a, 4b

(日本在住の学習者対象)では、ともに15名を分析の対象とした。実験3a, 4aでは形態類似性の主効果は有意ではなかった。実験3b, 4bでは音韻類似性の促進効果がみられた。

## 第2節 語彙判断課題による検討(実験5, 6)

第2節では、日本語の2字漢字単語について、韓日の形態・音韻類似性を操作し、語彙判断課題を用いた実験を行った。実験5a, 5b(韓国在住の学習者対象)では、37名を対象に漢字テストと語彙テストを実施し、その成績上位15名を上位群、下位15名を下位群として分析の対象とした。実験6a, 6b(日本在住の学習者対象)では、ともに15名を分析の対象とした。実験5a, 6bでは形態類似性の主効果が有意ではなく、実験5b, 6bでは音韻類似性の主効果が有意ではなかった。

## 第3節 実験3~6の総合考察

形態類似性を操作した実験については、実験3aから6aのいずれにおいても形態類似性の主効果は有意ではなかった。1字漢字を扱った実験から、L1の漢字知識が豊富であれば、形態類似性高の単語については、2言語間の形態表象の連結を媒介にして韓国語漢字の形態表象の活性化が生じると考えられる。しかし、2字漢字単語を扱った実験では形態類似性の効果がみられなかったことから、L1の漢字知識が豊富になり、韓国語漢字の形態表象の形成度が上がっている上位群であっても、個々の漢字の形態表象の鮮明度は上がっていないと推測される。そのため、韓国語漢字の形態表象と韓国語の音韻表象の連結、および、韓国語漢字の形態表象と概念表象の連結は弱く、読み上げ課題を用いた実験においても、語彙判断課題を用いた実験においても、形態類似性の高低による反応時間の差が生じなかったと考えられる。2字漢字単語は、1字漢字ほど厳密に形態が類似する漢字と区別して処理を行う必要がないため、個々の漢字の形態表象の鮮明度が1字漢字よりも低いと推測される。一方、下位群において形態類似性の効果がみられなかったのは、L1の漢字知識が少なく、韓国語漢字の形態表象の形成度が低いため、形態類似性高の単語であってもL1の形態表象の活性化が弱く、反応時間に差が生じなかったと考えられる。

音韻類似性を操作した実験については、読み上げ課題を用いた実験では、促進効果がみられた。しかし、語彙判断課題を用いた実験では音韻類似性の効果がみられず、意味処理が韓日の音韻表象の連結を媒介せずに行われたと考えられる。これらのことから、音韻類似性の促進効果は音声出力が要求される場合に生じることが分かった。

# 第5章 日本語2字漢字単語の視覚的認知における 単語タイプ(同根語と非同根語)の効果

## 第1節 実験7~10の概観

第5章では、日本語2字漢字単語について、韓日の単語タイプ(同根語・非同根語)を操作し、読み上げ課題を用いた実験(実験7, 8)と語彙判断課題を用いた実験(実験9, 10)を行った。実験7, 9では韓国在住の学習者を対象に、実験8, 10では日本在住の学習者を対象に、日本語の2字漢字単語の処理過程について検討した。

## 第2節 韓国在住の学習者を対象とした読み上げ課題による検討（実験7）

52名を対象に漢字テストと語彙テストを実施し、その成績上位15名を上位群、下位15名を下位群として分析の対象とした。その結果、単語タイプの主効果は有意ではなかったが、試みに上位群のみで分析したところ、同根語の促進効果がみられた。

## 第3節 日本在住の学習者を対象とした読み上げ課題による検討（実験8）

15名を対象に実験を行った。その結果、同根語の促進傾向がみられた。

## 第4節 韓国在住の学習者を対象とした語彙判断課題による検討（実験9）

37名を対象に漢字テストと語彙テストを実施し、その成績上位15名を上位群、下位15名を下位群として分析の対象とした。その結果、同根語の促進効果がみられた。

## 第5節 日本在住の学習者を対象とした語彙判断課題による検討（実験10）

15名を対象に実験を行った。その結果、同根語の促進効果がみられた。

## 第6節 実験7～10の総合考察

読み上げ課題を用いた実験7では単語タイプの主効果は有意ではなかったが、上位群のみの分析で、単語タイプに有意差がみられたことから、L1の漢字知識が豊富であれば、同根語の促進効果がみられる可能性があると考えられる。日本在住の学習者を対象とした実験8において単語タイプの主効果に有意傾向がみられたことは、この可能性を支持するものである。下位群については、強く主張はできないが、音韻類似性が低い同根語は、韓日の音韻表象の連結が弱いいため、迅速に処理が行われず、非同根語と読み上げ反応時間に差が生じなかったと考えられる。

語彙判断課題を用いた実験9、10では、単語タイプの主効果が有意であり、同根語の促進効果が生じた。語彙判断課題は、音声出力が要求されないため、韓日の音韻表象の連結を媒介せずに処理を行うことができる。そのため、同根語の音韻類似性が低いことはほとんど影響しなかったと考えられる。

# 第6章 総合考察

## 第1節 実験結果のまとめ

実験1から10の結果をふまえ、視覚呈示された日本語漢字単語の処理過程について、図1のような心内辞書モデルを考案した。学習の初期段階では、上の図のように、L1である韓国語漢字の形態表象の形成度が低く、他の表象への連結はないが、日本語の学習が進み、L1の漢字知識が豊富になると、下の図のように韓国語漢字の形態表象の形成度が上がり、日本語の形態表象との連結が強まる。しかし、韓国語の音韻表象および概念表象との連結強度は低い。日本語の形態表象、音韻表象の形成度は日本語の学習によって上がるため、表象間の連結も強まる。

韓国語の場合は、日本語漢字単語の処理において、ハンゲルの形態表象を想定する必要がある。中国語は漢字のみで成立している言語であるが、韓国語は漢字以外に表音文字であるハンゲルも使用されている。韓国語の音韻表象と強く連結しているのは、韓国語漢字の形態表象ではなく、ハン

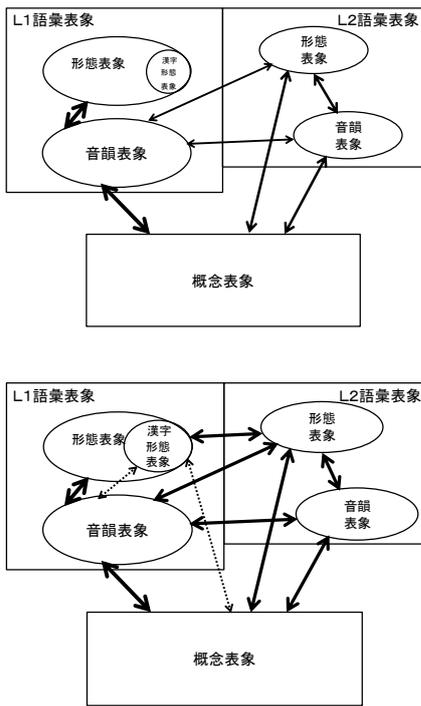


図1 韓国人学習者の日本語漢字単語の処理モデル

グルの形態表象であると考えられる。

韓国人学習者は、日本語の学習開始以前のL1の漢字知識が乏しく、日本語の学習を通して漢字に習熟していくため、学習初期の段階では、日本語の形態表象と日本語の音韻表象の連結が強い。同根語については、L1の音韻表象に一定の形成度があるため、日本語学習の比較的早い段階から日本語の形態表象と韓国語の音韻表象、日本語の音韻表象と韓国語の音韻表象の連結は強まっていく。しかし、韓国では日常生活における漢字の使用が限られているため、L1の形態表象の形成度は低く、他の表象との連結は弱い。一方、中国語系学習者の場合は、日本語の学習開始以前からL1の漢字知識が豊富であり、L1である中国語の形態表象の形成度は高い。このような違いがあるため、韓国人学習者の場合、中国語系学習者のように日本語漢字単語がまずL1で心的(内的)に音声化される(松見他, 2012)ことは、少なくとも日本語学習の初期段階ではほとんどないといえる。よって、韓国人学習者にとっては、中国語系学習者のように日本語の形態表象と日本語の音韻表象の連結を強めることよりも、日本語漢字の認識を促進するために、日本語の形態表象の形成度を上げることが重要となる。

## 第2節 本研究の意義と発展課題

本研究の意義は次の3点である。

1. 韓日の形態・音韻類似性を調査して数値化し、資料としてまとめた。
2. 材料については1字漢字と2字漢字単語、対象者については習熟度と学習環境の観点からL1の影響を検討した。
3. 中国語系学習者との比較の観点から日本語漢字単語の処理過程を検討し、そのモデルを提案した。

今後の課題としては、聴覚呈示、および文呈示による日本語漢字単語の処理過程を検討することがあげられる。

また、本研究の理論的枠組みをふまえた発展課題としては、次の2点があげられる。

1. 韓国語漢字の形態表象の活性化を想定しない場合の処理過程モデルの検討
2. 日本語の漢字知識の多寡が、L1である韓国語の心内辞書の形成過程にどのような影響を及ぼすかについての検討

これらの課題について、体系的な実験を重ねて検討することができれば、さらに精緻な心内辞書モデルを提示することができよう。

## 引用文献

- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李 光五 (1994). 『人間の言語情報処理—言語理解の認知科学—』サイエンス社
- 李 漢燮 (2005). 「最近の韓国における漢字事情」『日本語学』 24, 6-15.
- 池村大一郎 (2003). 「メンタルレキシコンの語彙情報へのアクセスモデル」門田修平 (編著)『英語のメンタルレキシコン 語彙の獲得・処理・学習』第4章 (pp. 63-82), 松柏社
- 石王敦子 (1999). 「バイリンガルの認知」梅本堯夫 (監修)・川口 潤 (編著)『現代の認知研究—21世紀へ向けて—』第9章 (pp. 119-129), 培風館
- 海保博之 (2002). 「漢字の指導」海保博之・柏崎秀子 (編著)『日本語教育のための心理学』第7章 (pp. 111-121), 新曜社
- 邱 學瑾 (2002). 「漢字圏・非漢字圏日本語学習者における漢字熟語の処理過程—意味判断課題を用いた形態・音韻処理の検討—」『教育心理学研究』 50, 412-420.
- 蔡 鳳香・費 曉東・松見法男 (2011). 「中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—語彙判断課題と読み上げ課題を用いた検討—」『広島大学日本語教育研究』 21, 55-62.
- 鄭 聖美 (2010). 「韓国人日本語学習者の漢字能力について」『日本語教育方法研究会誌』 17(2), 2-3.
- 宋 永彬 (2004). 「韓国の漢字」前田富祺・野村雅昭 (編)『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』第5章 (pp. 129-160), 朝倉書店
- 曹 喜澈 (1994). 「漢字系学習者のための漢字教育のあり方 韓国人の日本語学習者を中心に」『世界の日本語教育』 4, 61-73.
- 長野真澄・松見法男 (2013). 「中国語を母語とする上級日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程—日本留学中の学習者を対象とした語彙判断課題, 読み上げ課題による検討—」『広島大学日本語教育研究』 23, 33-40.
- 松見法男・邱 學瑾・桑原陽子 (2006). 「語彙の習得」縫部義憲 (監修)・迫田久美子 (編)『講座・日本語教育学 第3巻 言語学習の心理』第3章第2節 (pp. 161-183), スリーエーネットワーク
- 松見法男・費 曉東・蔡 鳳香 (2012). 「日本語漢字単語の処理過程—中国語を母語とする中級日本語学習者を対象とした実験的検討—」畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文 (編)『第二言語習得研究と言語教育』第1部 論文2 (pp. 43-67), くろしお出版
- Kroll, J. F., & Stewart, E. (1994). Category interference in translation and picture naming: Evidence for asymmetric connections between bilingual memory representations. *Journal of Memory and Language*, 33, 149-174.